

稲垣知雄氏が描いた大倉高等商業学校と修学旅行

—東京経済大学創立 120 周年記念展示

「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」展示記録補遺—

田 辺 可 奈

はじめに

本稿は、東京経済大学の前身にあたる大倉高等商業学校の卒業生で版画家の稲垣知雄氏（1902～80年）が制作した作品資料の分析を通じて、大倉商業学校・大倉高等商業学校の歴史に関する新たな知見を引き出し、考察を加えるものである。

高等商業学校に昇格して最初の卒業生である稲垣知雄氏は、卒業後に商業美術界で活躍するとともに、版画家としても知られ、数多くの作品を遺している。稲垣氏が遺した作品の中には在学中に描いたスケッチや版画作品も含まれる。それらは、1922（大正 11）年から 1923（大正 12）年に制作されたもので、高等商業学校に昇格した当時の、さらに関東大震災の被害を受ける前の、学校の様子を伝える貴重な資料である。2020 年に大倉集古館にて開催された東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」では、所蔵先の世田谷美術館から借用させていただき、これらの作品資料を展示した。

筆者は別稿にて、上記の 120 周年記念展示の展示内容について、展示担当者の立場から記録を発表した¹⁾。しかしその際は、質量ともに豊富な稲垣知雄氏の作品については、紙幅の都合から十分に言及できなかった。また従来、稲垣氏については、小池智子氏が、稲垣氏の 1920 年代後半から 30 年代の作品や旧蔵創作版画誌について論じているものの²⁾、在学中の作品について言及している研究は管見の限りないようである。そこで本稿では、展示した作品資料以外の当該時期の稲垣氏の作品資料にも言及しつつ、調査研究の成果を紹介したい。

特に注目したのは、稲垣氏の在学中の作品の多くを占める、修学旅行の際に描いた作品資料である。この修学旅行については、当該時期の『校友会雑誌』が欠落しており、詳細な旅程などを知ることが困難である。稲垣氏のスケッチ類は、日付と場所が記載されているものが多く、文字情報が限定されている現状で大変貴重な資料である。この作品群を通して、稲垣氏の参加した修学旅行がどのようなものだったのか、できる限り詳細に明らかにしたい。

さらに、この修学旅行については、稲垣氏の一年後輩である毛利晃雄氏が自著の中で、

稲垣知雄氏が描いた大倉高等商業学校と修学旅行

「海外への修学旅行は関東大震災後行われなくなった」と記しており³⁾、これが事実とすれば、学校としては最後の海外への修学旅行ということになる。外国商人に対抗しうる若い有能な人材を育成したいとの大倉商業学校以来の建学の精神からしても、海外への修学旅行は重要な試みであると考ええる。

本稿では、稲垣氏の在学中及び大倉高等商業学校に関連する作品を通して、関東大震災前の学校の様子や、修学旅行についての情報を読み取ることを目指す。さらに、この修学旅行の位置づけについて、大倉商業学校時代からの修学旅行を概観することで考えてみたい。

1. 作品の概要

稲垣氏は、1902（明治35）年に東京市小石川区白山で生まれ、私立京華商業学校から大倉高等商業学校へ進学、卒業後、1923（大正12）年6月に浅野造船所に入社した。恩地孝四郎、平塚運一に版画を学び、商業美術家協会研究所修了後に図案社を開業して独立、商業美術界で活躍した。その後、京北商業高校、広告美術学校などで教鞭をとった。国際版画協会の設立メンバーで、猫を好んで描いた⁴⁾。

商業美術界や版画界で活躍する傍ら、卒業後も大倉高等商業学校の広告研究会発行の『広告研究』第1集に「商業美術的要素において」との論考を寄稿している⁵⁾。広告研究会は商業広告を研究する学内の学術団体で、『広告研究』は広告研究会の会誌の創刊号である。これには学内の教員や広告学の研究者が、稲垣氏の他7本の論説・資料紹介などを寄稿している。同誌は日本における広告学研究の先駆的存在とされている。同じく広告研究会が1929（昭和4）年11月に開催した「交通広告資料展」の記録集である『交通広告資料』の表紙は稲垣氏のデザインである⁶⁾。このように、卒業後も稲垣氏は広告研究会を通して、学内の商業広告研究に寄与していた様子がうかがえる。

前述のように、稲垣氏の作品は、現在その多くが世田谷美術館に寄贈されている。在学中のスケッチ類もすべてその資料中に存在した。筆者が世田谷美術館で調査した結果、在学中（一部卒業後）及び大倉高等商業学校に関連する作品は27点あることが分かった。これらを制作年代順に一覧にしたのが表1である⁷⁾。

資料は描いた内容によって、大きく3つに分類できる。1つは高商3年生（1922年）の時の東京各所を描いたスケッチである（表1, No.1~8）。2つ目は、高商3年生の修学旅行のスケッチと版画である（表1, No.9~26）。3つ目は、関東大震災時のスケッチである（表1, No.27）。修学旅行の作品資料については、次章にて詳述し、その他は本章にて触れる。

また、スケッチ類は、No.9と、震災時のスケッチであるNo.27を除いて、形状によって2つに分類される（No.9は作品サイズ縦155ミリ×横210ミリ、No.27は縦111ミリ×横168ミリ）。縦140ミリ×横105ミリの、角が四角い形状の紙に描かれた作品は、表1の

表1 稲垣知雄氏 在学中及び大倉高等商業学校に関連する作品一覧【全て世田谷美術館所蔵】

	作品資料名	品質	制作年
1	スケッチ「尾久附近鋳物場」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年4月9日
2	スケッチ「霞が関」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年4月11日
3	スケッチ「霞が関」	紙, 鉛筆, 水彩	記載なし
4	スケッチ「王子ニテ」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年4月22日
5	スケッチ「上野図書館」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年5月10日
6	スケッチ「つきじ」	紙, 鉛筆	1922年5月12日
7	スケッチ「砲兵工廠前」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年5月19日
8	スケッチ「校庭」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年5月26日
9	1922 フィリッピン旅行スケッチ「SS. Alabama 丸にて」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月7日
10	1922 フィリッピン旅行スケッチ「海外旅行団団長 Alabama Marin 上 読書」	紙, 鉛筆	1922年6月9日
11	1922 フィリッピン旅行スケッチ「香港松原別館の窓より」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月14日
12	1922 フィリッピン旅行スケッチ「天草丸デッキパッセンジャー」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月18日
13	木版画「天草丸(甲板客船)」	木版画	1922年6月18日
14	1922 フィリッピン旅行スケッチ「北投軌道東停車場附近 欄干と森の小道」	紙, 鉛筆	1922年6月22日
15	1922 フィリッピン旅行スケッチ「台北台湾高等商業学校附近」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月22日
16	1922 フィリッピン旅行スケッチ「安平ニテ」	紙, 鉛筆	1922年6月24日
17	1922 フィリッピン旅行スケッチ「台南にて」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月24日
18	1922 フィリッピン旅行スケッチ「高雄 station 前」	紙, 鉛筆, 水彩	記載なし
19	1922 フィリッピン旅行スケッチ「台北 江山楼より」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月25日
20	1922 フィリッピン旅行スケッチ「総督府」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月26日
21	1922 フィリッピン旅行スケッチ「台北」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月26日
22	1922 フィリッピン旅行スケッチ「台北博物館」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月26日
23	1922 フィリッピン旅行スケッチ「台北」	紙, 鉛筆, 水彩	1922年6月26日
24	1922 フィリッピン旅行スケッチ「京都ニテ 京都東一条通精華女学校」	紙, 鉛筆	1922年7月1日
25	1922 フィリッピン旅行スケッチ「京都御所 寺町御門」	紙, 鉛筆	1922年7月1日
26	1922 フィリッピン旅行スケッチ「京都三条萬ヤニテ」	紙, 鉛筆	1922年7月1日
27	関東大震災時スケッチ「大倉高商」	紙, 鉛筆, 水彩	1923年12月23日

※作品資料名および制作年は作品資料の表面もしくは裏面の記載による。

稲垣知雄氏が描いた大倉高等商業学校と修学旅行



図版 1 スケッチ「校庭」
稲垣知雄，1922年5月26日，世田谷美術館蔵



図版 2 「運動部選手」
1922年，大倉商業学校卒業アルバム『第二十一回卒業記念写真帖』，赤誠堂，1923年3月（『東京経済大学の100年』東京経済大学，2005年，p.38）。

後ろに写る建物が武道場。真ん中の丸い電灯や屋根の形，柱の位置が「校庭」に描かれる建物と一致する。



図版 3 関東大震災時スケッチ「大倉高商」
稲垣知雄，1923年12月23日，世田谷美術館蔵

No.1~8, 10, 12, 19, 26の12点である。縦180ミリ×横134ミリの，角が丸くカットされた形状の紙に描かれた作品は，表1のNo.11, No.14~18, 20~25の12点である。この形状の違いは，描かれたスケッチブックの違いと推察される。また，縦180ミリ×横134ミリの紙に描かれたスケッチの紙面には，上部（紙面が横の場合は左部）の真ん中附近に小さ

な穴と亀裂がある。穴の辺りを避けて絵が描かれているように見えること、絵が描かれた上から亀裂が入っているように見えることから、穴はスケッチをする時からあったもの、亀裂は後に入ったものと思われる。

東京各所のスケッチは、8点ある（No.1～8）。時期は1922年4月から5月にかけての在学中のもので、王子や築地、霞が関、上野図書館などが描かれる。「砲兵工廠前」と裏面にメモされたスケッチは、当時、小石川にあった東京砲兵工廠を描いたものと思われる。

これらのスケッチの中で注目すべきは「校庭」である（図版1）。描かれた建物は、卒業アルバムに残る写真から、恐らく1922年5月当時の大倉高等商業学校の武道場と推定できる（図版2）。大倉高等商業学校の建物は、1923年9月の関東大震災によって大部分が焼失した。スケッチ「校庭」は、関東大震災前の校舎を描いている点で貴重である。さらに、残っている写真は白黒のみのため、水彩で色が残るこのスケッチは、校舎（武道場）の色を参照することができる、現在のところ唯一のものである。

表1のNo.27は関東大震災時のスケッチブックの中の1作品である。このスケッチブックには都内各所の震災の様子がスケッチされており、No.27はその中で「大倉高商」とメモされたスケッチである（図版3）。震災直後の大倉高商の様子が生々しく描かれる。このスケッチのみ、卒業後（卒業は関東大震災の年1923年3月）のものである。

2. 修学旅行に関する作品資料について

稲垣氏は大倉高等商業学校3年生で修学旅行に参加した。その時に制作した作品資料は、スケッチ類（表1, No.9～12, No.14～26）16点と、木版画「天草丸（甲板客船）」1点の計17点が確認されている。これらの作品の多くは、「1922 フィリピン旅行」と稲垣氏がメモしたタトウで保護されている。120周年記念展示の際は、この中から9点を世田谷美術館から借用、展示させていただいた。

この修学旅行については、スケッチ類以外の資料として、『校友会雑誌』第31号に「（五月）二十八日海外見学旅行として高三生徒十二名安部教授に引率出発／七月一日海外旅行団一行帰京」の記述がある⁸⁾。また、この修学旅行時の集合写真（東京経済大学史料室所蔵）に、「南洋旅行団解散ニ先キ立テ、於基隆記念撮影 一九二二・六・二六」と記されている。これは稲垣氏と同じくこの旅行に参加していた元卒業生の方からの寄贈資料である。これらの記載からは、旅行期間が5月28日から7月1日であったこと、南洋方面へ旅行したこと、参加学生は12名であったことが分かる。

これに加えて、稲垣氏の残したスケッチを時系列に並べることで、この修学旅行についてより多くのことを明らかにしたい。先に提示した表1は、スケッチ群を制作年月日順にして、順に考察を加えていきたい。これらの資料から、「フィリピン旅行」について

稲垣知雄氏が描いた大倉高等商業学校と修学旅行

分かることは以下の通りである。

『校友会雑誌』第31号の記事から、出発は1922年5月28日だったことが分かる。旅の最初のスケッチは、1922（大正11）年6月7日のスケッチ「SS.Alabama 丸にて」（図版4，表1 No.9）である。乗船したと思われる「あらばま丸」の様子を水彩にて描いている。続いて6月9日のスケッチ「海外旅行団団長 Alabama Marin 上 読書」（図版5，表1 No.10）にて団長の阿部新教授を描いている。

あらばま丸は大阪商船の船で、当時はビューゼットサウンド線を航行していた⁹⁾。寄港地は、シンガポール—マニラ—香港—上海—青島—日本各港—サンフランシスコ—パナマ—ハバナ—ニューヨークである。『大阪毎日新聞』大正11年5月25日の出航情報欄に、「大阪商船汽船出帆 上海マニラ香港行あらばま丸三十日午前十時神戸」とあり、学生たちの出航地は不明であるが、「フィリピン旅行」とのメモから、行先の一つにフィリピンがあったと考えられるため、あらばま丸にてフィリピンのマニラに向かったと思われる。旅行参加者の鈴木君三郎は校友会雑誌に「アラバマ丸にて」と題した詩歌を寄稿している¹⁰⁾。

フィリピンに関するスケッチはない。理由は不明である。船上以外で初めてのスケッチは、6月14日の「香港松原別館の窓より」（図版6，表1 No.11）である。松原別館とは、香港にあった日本人向けの旅館の一つである¹¹⁾。

香港の次のスケッチは、「天草丸デッキパッセンジャー」である（図版7，表1 No.12）。天草丸のデッキにて過ごす生徒たちの様子が描かれている。デッキパッセンジャー（甲板客船）については、日本人は使用禁止だったらしく、特別に乗船を許可されたため、記念にスケッチを残したのかもしれない¹²⁾。稲垣氏の同級生の方が東京経済大学史料室に寄贈した写真の中に、「卒業の翌年か翌々年、南洋旅行で香港の三井物産木村支店長に大変御世話になった方の帰朝歓迎会の写真でないかと思ひます」とのメモ書きが附してある。デッキパッセンジャーに乗船可能となつたいきさつは不明であるが、修学旅行に現地の卒業生の力添えがあったことは確かなようである¹³⁾。

天草丸については、『香港事情』に次のように記されている¹⁴⁾。

一. 大阪商船株式會社

(甲) 香港淡水基隆線

寄港地 香港、汕頭、厦門、淡水、基隆（往復共）

定期 一週一回 毎日曜日香港發・毎水曜日香港著

使用船 開城丸、天草丸

この時期、天草丸は、香港と台湾基隆との間を運行する定期船であったことが分かる。香港の次のスケッチは台北であり、香港の次の目的地は台湾だったと推測される。制作年月日の1922年6月18日は日曜日であり、この日に香港を天草丸にて出航し、台湾基隆へ移動したのではないか。



図版4 1922 フィリピン旅行スケッチ「SS. Alabama 丸にて」
稲垣知雄, 1922年6月7日, 世田谷美術館蔵



図版5 1922 フィリピン旅行スケッチ
「海外旅行団団長 Alabama Marin 上
読書」
稲垣知雄, 1922年6月9日,
世田谷美術館蔵



図版6 1922 フィリピン旅行スケッチ
「香港松原別館の窓より」
稲垣知雄, 1922年6月14日,
世田谷美術館蔵



図版7 1922 フィリピン旅行スケッチ
「天草丸デッキパッセンジャー」
稲垣知雄, 1922年6月18日,
世田谷美術館蔵



図版8 木版画「天草丸（甲板客船）」
稲垣知雄, 1922年6月18日,
世田谷美術館蔵

また、この作品は、稲垣氏の最初の版画作品である木版画「天草丸（甲板客船）」（図版8、表1 No. 13）の下絵でもある。この版画作品は、同じ修学旅行に参加していた同級生も所蔵していることが分かっており、旅行の記念に同級生に配布したものと思われる。同じ品質の作品を複数人に配布することができるため、版画という技法を選択したのだろうか。本作は、稲垣氏の版画家としての第一歩を印す重要な作品と位置づけられるのではないだろうか。

次に、制作年月日が1922年6月22日の作品資料は、「北投軌道東停車場附近」（表1 No. 14）と「台北台湾高等商業学校附近」（図版9、表1 No. 15）の2点である。台北近郊の温泉地である北投や台北にある台湾高等商業学校附近が描かれることから、台北近郊に滞在していたことが分かる。

北投は、台湾最大の温泉郷である。温泉が発見されたのは1893（明治26）年のこと、1896（明治29）年には大阪出身の平田源吾によって天狗庵が開かれたのが温泉街の端緒となり、陸軍によって台北からの道路が開かれ、1901（明治34）年8月に淡水線が開通、さらに新北投支線が開通すると温泉旅館が相次いで開業するようになった¹⁵⁾。「北投軌道東停車場附近 欄干と森の小道」は、恐らく新北投支線沿いの風景と思われるが、場所の特定には至らなかった。



図版9 1922 フィリッピン旅行スケッチ
「台北台湾高等商業学校附近」
稲垣知雄, 1922年6月22日, 世田谷美術館蔵

「台北台湾高等商業学校附近」の台北台湾高等商業学校とは、1919（大正8）年6月に開校した台湾総督府高等商業学校を指すと思われる。この学校は、台北市幸町にあり、周辺は住宅街だったとのことで¹⁶⁾、附近の家並みを描いたものと思われる。

この通称「台北高商」には、大倉商業学校創立当初からの教諭であった切田太郎氏が、台北高商創立時に教授として赴任し、1926（大正15）年には校長に任ぜられている¹⁷⁾。切田氏は、台北高商赴任前には、大倉商業学校創立者の大倉喜八郎が1907（明治40）年4月、当時の大韓帝国の漢城（現ソウル）に創立した善隣商業学校の教諭を勤めていた記録も残っている。『校友会雑誌』第20号には、1915（大正4）年9月2日～9月17日に実施された朝鮮修学旅行の記録が残っている。この中で、京城滞在中、善隣商業学校の教諭である切田氏の自宅に宿泊したこと、また開城でも切田氏の紹介で日本人（森山氏）の自宅に宿泊したことが記されている¹⁸⁾。台北高商を訪れたのも（スケッチは高商「附近」であるが実際に訪問していると思われる）、大倉高商に縁のある切田氏のような人物がいたことが大きかったのかもしれない。

その後、1922年6月24日のスケッチ「安平ニテ」（図版10、表1 No.16）、「台南にて」（図版11、表1 No.17）が描かれる。台南方面を訪れたと考えられる。台南は、日清戦争後



図版 10 1922 フィリピン旅行スケッチ
「安平ニテ」
稲垣知雄, 1922年6月24日,
世田谷美術館蔵



図版 11 1922 フィリピン旅行スケッチ
「台南にて」
稲垣知雄, 1922年6月24日,
世田谷美術館蔵

の日本統治が始まるまでの約 200 年間、台湾の中心都市であった。日本統治時代、中心は台北へ移ったが、台南でも日本人による大規模な都市や農村の開発が行われた¹⁹⁾。安平（あんぴん）は台南から西に 4 キロほど離れた小都市で、台湾海峡に面し、台湾で最初に外部と接触を持った土地であり、「台湾」の語源となったシラヤ族が住む「タイオワン」という集落があったと伝えられる歴史ある街である²⁰⁾。制作年月日が不明である「高雄 station 前」もこの時に訪れたのではないかと推定される。高雄は台湾南部最大の都市であり、大きな港湾を擁し、大正時代以降は台南を凌ぐようになっていた²¹⁾。

「安平ニテ」は船（戎克船か）が停泊している様子が描かれている。1930 年代の安平港の写真（図版 12）と比較すると、船の形状など特徴を捉えて描いていることが分かる。安平港では 1922 年 4 月から台南運河の建設が始まっていた。また「台南にて」で描かれる家屋は、屋根や窓の形状から、台湾の伝統的家屋を描いたものと見られる²²⁾。また、「高雄 station 前」で描かれる風景は、後景に高雄駅、前景にある木の形状から、高雄など台湾南部の特産品であった「ココ椰子」と、鉋でそれを収穫している人を描いていると思われる²³⁾。これらのスケッチからだけでも、稲垣氏が、旅行中の少ない時間の中で、その土地の文化や風習について特徴を捉えて的確に描いていたことが分かる。



図版 12 「臺南安平風景」 1930年代



図版 13 1922 フィリッピン旅行スケッチ
「台北 江山楼より」
稲垣知雄, 1922年6月25日,
世田谷美術館蔵

次の作品は、1922年6月25日の「台北 江山楼より」(図版13, 表1 No.19)である。旅行団は25日には台北に戻ったのだろう。江山楼は、1921年創業、当時5階建ての建物で、高級官僚や風流名士が集った大酒樓である。画面は青から赤紫を基調としている。夕暮れ時の江山楼から見た台北の様子を描いたものだろうか。

次の作品は、1922年6月26日の「総督府」(表1 No.20), 「台北」(図版14, 表1 No.21), 「台北博物館」(図版15, 表1 No.22), 「台北」(表1 No.23)である。旅行団は25日に引き続き、台北に滞在したと見られる。

「総督府」は台湾統治のための日本の出先機関であった台湾総督府を描いたものと思われる。台湾総督府の竣工は1919(大正8)年3月31日であり、竣工後3年の比較的新しい時期にここを訪れていることになる。第二次世界大戦後は改修され、現在も台湾総統府として使用されている。

「台北」(図版14, 表1 No.21)は、台北以外の記載がない。しかし、当時の古写真と比較すると、台北城の城門を描いたものと思われる。窓の形状などから北門あるいは南門を描いたと推定される(図版16)。

「台北博物館」は、日本統治下の1908年に設置された、台湾で最も古い博物館である。日本政府が台湾南北縦貫鉄道の開通を記念するために、1908年10月24日に「台湾総督府博物館」を設立したのが始まりで、開館当時のコレクションは1万点を数えたとされる。稲垣氏が描いた建物は、1915年に竣工し、台湾の公共建築物を代表する建築のひとつとな



図版 14 1922 フィリピン旅行スケッチ
「台北」
稲垣知雄，1922年6月26日，
世田谷美術館蔵



図版 15 1922 フィリピン旅行スケッチ
「台北博物館」
稲垣知雄，1922年6月26日，
世田谷美術館蔵



図版 16 「台北城北門」1895-1901年，秋恵文庫所蔵

った新館と思われる。2度の修復を経て、現在は国立台湾博物館本館として使用されている²⁴⁾。

台湾で描かれたスケッチはこれが最後である。先述した南洋旅行解散を記念して撮影した日付が6月26日であることから、この日以降、基隆から日本への帰途に着いたと推測され

る。

この後、表1のNo.24～26にあるように、京都のスケッチが続く。基隆から日本へ、そして京都へ移動し、旅は終わりを迎えた。

以上から、この修学旅行は、以下のような旅程をたどったと考えられる。

5月29日	出発
6月7日	洋上（アラバマ丸）
6月9日	洋上、フィリピン・マニラへ向かったか
6月14日	香港
6月18日	洋上（天草丸）香港—基隆
6月22日	北投・台北台湾商業学校（附近）
6月24日	安平・台南・高雄
6月26日	台湾総督府・台北博物館・江山楼（台北）
6月26日	基隆（南洋旅行団解散）
7月1日	京都

稲垣氏のスケッチを通して、これまで不詳であった修学旅行の旅程（の一部）を明らかにすることができた。また、台湾の生活や風景を、旅中の短時間で的確に描写する稲垣氏の画力も確認することができた。さらに、木版画「デッキパッセンジャー（甲板客船）」は、同級生と旅の思い出を共有するために制作・配布されたものと思われ、稲垣氏の木版画制作の第一歩として重要な作品であることを確認した。

次に、この修学旅行の位置づけについて、大倉商業学校以来の修学旅行を概観することによって、考えてみたい。

3. 大倉商業学校・高等商業学校の修学旅行

先述したように、1926（大正15）年卒業の毛利氏は、大倉高商では社会人になる前に「異国文化」に接しておくべきとの主旨で、海外旅行が恒例となっていたが、関東大震災のため、第2回卒業生からは海外卒業旅行はなくなり、残念だったと記している²⁵⁾。1922年の修学旅行の参加者は高等商業学校に昇格して初めての入学生で、いまだ大倉商業学校の生徒も在籍しており（最後の卒業生は1923年3月）、体制が移行する過渡期でもあった。大倉商業学校時代から大倉高等商業学校にいたる間の修学旅行を概観し、1922年の修学旅行の位置づけを明らかにしたい。

1900（明治33）年9月の開校以降の修学旅行について、表2と表3にまとめた。表を2つに分けた理由は、これらの旅行が参加者の構成から大きく2つに分けられると考えたからである。生徒・学生全体が対象となるもの（表2）と、有志によるもの（表3）である。各

稲垣知雄氏が描いた大倉高等商業学校と修学旅行

表には、管見の限りで、国内・国外、また複数日の旅行を団体で行っている場合も含めて記載した。なお、この表は校友会雑誌や学生新聞等を参照し作成した。欠号もあり、すべての情報を網羅できているわけではない。

海外への修学旅行はすべて有志によるものである（表3）。有志による修学旅行の考察を通して、1922年の修学旅行の位置づけを探っていきたい。その前に、生徒・学生全体が対象となる修学旅行についても概観しておきたい。

(1) 生徒・学生全体が参加する修学旅行

生徒・学生全員が参加する修学旅行の初見は、1904（明治37）年4月に実施されたものである。以降、ほぼ毎年、春季・秋季の年2回実施され、本科と予科それぞれで行われていた。行先は、千葉や神奈川、山梨など東京近郊が主であった。

高等商業学校へ昇格後は、学年ごとに、毎年5月から6月に実施されることが多く、行先は仙台や信州など、大倉商業学校時代よりも遠方となっている。『30年史』の「修学旅行は年々、各学年共各地方に於て行はれて居つた（後略）。」との記述は、高商昇格後の実態であろう²⁶⁾。1927（昭和2）年6月1日～6月4日に実施された信州方面への3年生の「修学旅行」が学年単位で実施された修学旅行の記録の最後である。この旅行では、参加できない学生のために千住製絨所、隅田川停車場へ行くコースと鐘ヶ淵紡績会社、大日本ビール会社吾妻橋工場へ行くコースが実施されている。このような措置は、大倉商業学校時代、有志による修学旅行へ参加できなかった生徒へも実施されている（後述）。

1930年代に入ると修学旅行の記録が少なくなっていく。本科生については、1937（昭和12）年1月16日～1月17日に実施された3A卒業記念旅行が記録に見える最後である。一方、中等科4年生と専修科3年生においても修学旅行（卒業旅行）を行っており、記録上は1938（昭和13）年5月上旬に実施されたものが最後である。高商3年の野外演習は修学旅行を兼ねた古戦場見学が行われていたが、1932年に連隊での宿営に変更され、翌33年以降は野外での軍事演習が実施されるようになったことが指摘されている²⁷⁾。この背景には1932（昭和7）年に軍事教練の野外演習が強化されたことがある。1938（昭和13）年6月に勤労動員が始まったことと軌を一にして²⁸⁾、本科と中等科、専修科ともに修学旅行の記録が見られなくなる。

生徒・学生全体が参加する修学旅行は、大倉商業学校時代から高商へ昇格して以降、実施される回数（1年に2回から1回へ）や行先（近隣から遠方へ）などに変化があったことが確認できる。また、1930年代以降、学校全体が戦時体制下へ取り込まれていく中で、修学旅行として行われていた古戦場見学が野外演習に振り替えられるなど、修学旅行が記録に見られなくなっていくことを確認した。

次に、1922年の稲垣氏たちの修学旅行について検討するにあたり、有志の生徒・学生に

よる修学旅行について時代を追って概観したい。

(2) 有志の生徒・学生の修学旅行

有志の生徒による修学旅行で、史料で最初に確認できるのは、表3 No.1の「満韓視察旅行」である。参加者は本科生の3年、4年生16名であった。この修学旅行について、『大倉高等商業学校三十年史』²⁹⁾に、「満州旅行団出発」の項にて、「明治三十九年七月、暑中休暇を利用して、文部省は各学校に勧告斡旋し、満州地方の視察旅行を奨励した、そこで各学校は満韓旅行団を組織し、本校も有澤教諭監督、本科生十六名を率ゐて之に参加し、七月十九日、長途の旅に新橋駅を出発した。参加校次の如し。[中略]尚この時の旅行をキッカケに本科時代に於て其後も屢々満鮮旅行を行ひ大いに得る所が有つた」と記される。実際に、この満州旅行以降、大倉商業学校時代、有志の生徒たちによる修学旅行は、現在残されている資料で判明する範囲でも、国内・国外合わせて6回実施されている。行先は、関西、南清（上海・南京）、京阪・九州、朝鮮、北海道・樺太と多岐にわたる。『校友会雑誌』の欠号により行先の確認できない年度も多いので、30年史の通り、満州を訪れた年もあったかもしれない³⁰⁾。

旅行者は、ほぼ本科の3、4年生であり、4年生だけのこともある。卒業年あるいはその前年に行われる卒業旅行の性格が強い。引率の教諭が付き、学校行事の一つとして行われていることがうかがわれる。

旅行の目的は、1909（明治42）年の関西旅行の報告記に、「広く関西地方に於ける商工業を視察して学問と実際との両者を吟味し真に見聞を広めんとするにあり」と記されるように³¹⁾、商工業の実際を視察して見聞を広めるためであった。

旅行の成果は、報告会や『校友会雑誌』での旅行記や報告書の掲載などを通して発表された³²⁾。近年、『東京経済大学百二十年史 資料編第一巻』に旅行記の一部が掲載され、解題にて、満韓旅行のレポートについては、「大倉商業学校の生徒らしく、各地の貿易業や産業について紙幅が費やされている」と指摘している³³⁾。

また、修学旅行へ行けなかった生徒たちを対象に、見学会を実施している例がある。1909（明治42）年10月13日～27日に実施された「東京横浜 諸会社、工場、学校参観」は、本科生21名が関西方面へ旅行中に実施されている³⁴⁾。1915（大正4）年9月13日と9月17日の「横浜方面視察」「王子製紙会社・東京製絨会社視察」は、「朝鮮旅行団の留守組」によって実施されている³⁵⁾。この間、本科の3、4年生は朝鮮へ修学旅行中であった。先述したように、高商昇格後にもこのような例がある³⁶⁾。修学旅行の実施時期が夏季休業中と重ならなかった場合、このような対応が取られたものと思われる。また、このことは、有志による修学旅行が学校行事の一つとして組み込まれていたことをうかがわせるものである。1922年の修学旅行も、夏季休業中ではないため、残った学生たちに同様の対応が取られたかもし

表2 生徒・学生全員が参加する修学旅行

No.	名称	学年	人数	行先	実施日	典拠		発行日	引率
						1号	2号		
1	修学旅行	本科生	148人	甲州方面	1904/4/23~4/25	大倉商業学校校友会雑誌	1号	1904/7/12	
2	修学旅行	予科生	118人	成田方面	1904/4/24~4/25	大倉商業学校校友会雑誌	1号		
3	春期修学旅行	本科生	139人	伊香保・榛名方面	1905/4/28~4/29	大倉商業学校校友会雑誌	3号	1905/8/13	
4	春期修学旅行	予科生	150人	江の島・鎌倉方面	1905/4/28~4/29	大倉商業学校校友会雑誌	3号		
5	秋期修学旅行	本科生	79人	銚子方面	1905/10/28~10/29	大倉商業学校校友会雑誌	4号	1905/12/27	
6	秋期修学旅行	予科生	85人	成田方面	1905/10/28~10/29	大倉商業学校校友会雑誌	4号		
7	春期修学旅行	本科生	175人	箱根方面	1906/4/26~4/28	大倉商業学校校友会雑誌	5号	1906/10/15	
8	春期修学旅行	予科生	142人	高雄山	1906/4/26~4/27	大倉商業学校校友会雑誌	5号		
9	春期修学旅行	本科生	169人	修善寺箱根方面	1907/4/24~4/26	大倉商業学校校友会雑誌	6号	1907/7/28	
10	春期修学旅行	予科生	139人	鎌倉江の島方面	1907/4/24~4/25	大倉商業学校校友会雑誌	6号		
11	秋期修学旅行	本科生・予科生	250余人	日光方面	1907/9/21~9/22	大倉商業学校校友会雑誌	7号	1908/3/28	切田・古箆・西郷・三田村・有澤・田中・松平・野田・赤星・井関諸職員
12	春期修学旅行	本科生		仙台方面	1908/5/1~5/4	大倉商業学校校友会雑誌	臨時発刊	1908/6/1	古箆・田尻・森教諭・有澤助教諭・野田書記
13	春期修学旅行	予科生		箱根方面	1908/5/1~5/2	大倉商業学校校友会雑誌	臨時発刊	1908/6/1	切田・三田村教諭・田中助教諭・野田書記
14	春期修学旅行	本科1,2年生		箱根方面	1911/5/3~5/5	大倉商業学校校友会雑誌	10号	1911/7/21	
15	春期修学旅行	本科3,4年生		伊香保方面	1911/5/3~5/5	大倉商業学校校友会雑誌	10号	1911/7/21	
16	春期修学旅行	予科生		箱根方面	1911/5/4~5/5	大倉商業学校校友会雑誌	10号	1911/7/21	
17	修学旅行	本科2,3,4年生		伊豆修善寺・熱海方面	1912/5/2~5/4	大倉商業学校校友会雑誌	12号	1912/9/7	
18	修学旅行	本科1年生・予科生		逗子鎌倉方面	1912/5/3	大倉商業学校校友会雑誌	12号	1912/9/7	
19	春期修学旅行	本科1年生・予科生		上州金山方面	1913/4/30	大倉商業学校校友会雑誌	14号	1913/7/24	
20	春期修学旅行	本科2,3,4年生		伊豆相模方面	1913/4/29~5/1	大倉商業学校校友会雑誌	14号	1913/7/24	
21	修学旅行	本科2,3,4年生		日光足尾方面	1915/10/20~10/22	大倉商業学校校友会雑誌	20号	1915/12/25	
22	修学旅行	本科1年生・予科生		秩父方面	1915/10/21~	大倉商業学校校友会雑誌	20号	1915/12/25	
23	秋期修学旅行	本科2,3,4年生		妙義・榛名方面	1916/10/27~10/30	大倉商業学校校友会雑誌	22号	1917/2/3	
24	秋期修学旅行	本科1年生・予科生		高雄山方面	1916/10/27	大倉商業学校校友会雑誌	22号	1917/2/3	

25	春期修学旅行	本科1年生・予科生		鎌倉江の島方面	1917/5/16	大倉商業学校校友会雑誌	23号	1917/7/25	
26	春期修学旅行	本科2,3,4年生		相模・駿河方面	1917/5/15~5/18	大倉商業学校校友会雑誌	23号	1917/7/25	
27	春期修学旅行	本科1年生・予科生		川越方面	1918/5/15	大倉商業学校校友会雑誌	25号	1918/7	
28	春期修学旅行	本科2,3,4年生		修善寺・熱海方面	1918/5/15~5/17	大倉商業学校校友会雑誌	25号	1918/7	
29	秋期修学旅行	本科2,3,4年生		甲府方面	1918/10/13~16	大倉商業学校校友会雑誌	26号	1919/3/31	
30	秋期修学旅行	本科1年生・予科生		金沢八景・江の島方面	1918/10/14	大倉商業学校校友会雑誌	26号	1919/3/31	長岡
31	修学旅行	本科1年生・予科生		武州御嶽方面	1919/10/23	大倉商業学校校友会雑誌	28号	1920/6/25	
32	修学旅行	本科2,3,4年生		名古屋・木曾・長野方面	1919/10/23~10/26	大倉商業学校校友会雑誌	28号	1920/6/25	
33	修学旅行	本科3年		琴平宮島方面	1922/5/14出発	大倉商業学校校友会雑誌	31号	1923/3/29	
34	修学旅行	高等3年		松島方面	1924/6/6~6/9	葵友会会報	1号	1925/9/1	
35	修学旅行	高等3年	2班に分かれる	大島・伊豆・熱海方面	1925/6/3~	葵友会会報	2号	1926/6/1	
36	修学旅行	高等2,3年	2班に分かれる	仙台・塩釜・鳴子・飯坂・那須方面	1926/5/31~6/4	大倉高等商業学校校友会雑誌	37号	1926/7/25	
37	修学旅行	高等2,3年	2班に分かれる	信州方面	1926/5/31~6/4	大倉高等商業学校校友会雑誌	37号	1926/7/25	
38	修学旅行	高等3年	修学旅行不参加者	千住製絨所・隅田川停車場	1927/6/1~6/4	大倉高等商業学校校友会雑誌	39号	1927/6/25	
39	見学会	高等3年	修学旅行不参加者	鐘ヶ淵紡績会社・大日本ビニール会社・吾妻橋工場	1927/6/2	大倉高等商業学校校友会雑誌	39号	1927/6/25	小畑・松本
40	見学会	高等3年		伊豆大島	1927/6/3	大倉高等商業学校校友会雑誌	39号	1927/6/25	塚本・橋本
41	修学旅行(卒業旅行)	夜学中等科4年生	62名	京阪地方(伊勢・奈良・大阪・京都)	1930/6/7~6/8	大倉高商新聞	27号	1930/6/25	
42	修学旅行(卒業旅行)	夜学中等科4年生	32名	長野県上田・長野地方	1930/6/7~6/11	大倉高商新聞	27号	1930/6/25	
43	古戦場見学	3年		大島方面	1931/6/2~6/5	大倉高商新聞	35号	1931/5/25	
44	卒業記念旅行	夜学専修科3年		大島方面	1931/6/7~6/8	大倉高商新聞	35号	1931/5/25	
45	修学旅行	中等科・専修科		水郷巡り(1班)伊豆方面(2班)	1932/4/22~23	大倉高商新聞	45号	1932/5/25	
46	卒業旅行	中等科4年生		甲川三峠方面	1934/6/2~6/3	大倉高商新聞	66号	1934/6/25	
47	卒業旅行	専修科3年生		赤城山麓	1934/6?	大倉高商新聞	66号	1934/6/25	
48	キャンプ登山	中等科		熱海	1934/7中旬	大倉高商新聞	66号	1934/6/25	
49	3A卒業記念旅行	3年A組		伊豆方面	1937/1/16~1/17	大倉高商新聞	91号	1936/12/25	
50	修学旅行	中等科4年生		水郷方面	1937/5/8~5/9	大倉高商新聞	95号	1937/5/25	
51	修学旅行	専修科3年生			1937/5/8~5/9	大倉高商新聞	95号	1937/5/25	
52	卒業修学旅行	中等科4年生			1938/5上旬	大倉高商学報	104号	1938/4/25	
53	卒業修学旅行	専修科3年生			1938/5上旬	大倉高商学報	104号	1938/4/25	

表3 有志による修学旅行

名称	学年	人数	行先	実施日	典拠	発行日	引率(担当) 教員
1 満韓視察旅行	本科3,4年	16名	大連・旅順・奉天・鉄嶺・遼陽・營口・金州	1906/7/19~8/15	大倉商業学校校友会雑誌 5号,6号	1906/10/15 1907/7/28	監督者 有澤先生
2 関西旅行	本科生	21名	関西(神戸・大阪・奈良・京都・伊勢・名古屋) 東京府立工業学校(明治42年10月13日) 高等工業学校(10月13日) 高等工業学校(10月13日) 芝浦製作所(10月14日) 東京倉庫会社(10月19日) 日本麦酒会社(10月19日) 浅野セメント会社(10月20日) 長島製材所(10月20日) 商船学校(10月21日) 水産講習所(10月21日) 淀橋浄水場(10月22日) 西ヶ原蚕業講習所(10月22日) 日本銀行(10月27日) 麻布天文台	1909/10/13~10/27	大倉商業学校校友会雑誌 臨時増刊	1910/4	松村先生
3 東京横浜、諸会社、工場、学校参観	本科生		門司・博多・上海・南京・長崎、下関	1910/7/6~7/25	大倉商業学校校友会雑誌 10号	1911/7/21	古籔・田中
4 南清修学旅行	本科3,4年生	18名(有志)	京阪を經由し九州地方	1912/7/20~	大倉商業学校校友会雑誌 12号	1912/9/7	中村(茂雄) 教諭
5 京阪・九州修学旅行	本科4年生	14名	東京製・神戸・門司・釜山・大邱・京城・開城・平壤・仁川・下関・広島	1915/9/2~9/17	大倉商業学校校友会雑誌 20号	1915/12/25	長岡
6 朝鮮修学旅行	本科3,4年生	17名	横浜税関・横浜生糸検査所	1915/9/13	大倉商業学校校友会雑誌 20号	1915/12/25	古籔
7 横浜方面視察 王子製紙会社・東京製紙会社視察	本科3,4年生	53名(朝鮮旅行団の留守組) 朝鮮旅行団の留守組	王子製紙会社・東京製紙会社	1915/9/17	大倉商業学校校友会雑誌 20号	1915/12/25	古籔
8 朝鮮修学旅行	本科3,4年生	28名	横浜・神戸・門司・下関・釜山・京城・開城・平壤・釜山・下関	1918/7/14~7/25 (下関にて解散)	大倉商業学校校友会雑誌 26号	1919/3/31	坂口

9	北海道樺太旅行	本科生か	14名	上野・福島・仙台・青森・室蘭・登別・白老・旭川・札幌・小樽・大泊・栄濱・豊原・宗谷海峡・大泊・小樽	1920/8/2~8/15	『大倉高等商業学校30年史』	1930/10/25	石黒武松
10	海外見学旅行 第1回鮮・満・支視察旅行団	高商3年 東亜事情研究会 会会員	12名 10名	マニラ・香港・台北・北投・台南・安平・高雄・基隆・京都 朝鮮・満州・支那方面	1922/5/28~7/1 1925/7/23~8月下旬	大倉商業学校校友会雑誌 大倉高等商業学校校友会雑誌	1923/3/29 1926/3	阿部新
12	第2回満鮮支那視察旅行	東亜事情研究会 会会員	不明	東京・下関・釜山・京城・平壤・本溪湖・ハルビン・大連・旅順・北京・下関	1926/7~8(夏季休業中)	大倉高等商業学校校友会雑誌	1927/2/20	
13	第3回満鮮旅行	東亜事情研究会 会会員	不明	前回と同様(東京・下関・釜山・京城・平壤・本溪湖・ハルビン・大連・旅順・北京・下関)	1927/7/25~8月下旬	『大倉高等商業学校30年史』	1930/10/25	
14	視察旅行	東亜事情研究会 会会員	6名	神戸・上海・杭州・蘇州・南京・香港・澳門・廣東・厦門・高雄・台南・嘉義・台北・門司	1929/7/11~8/15	『大倉高等商業学校30年史』	1930/10/25	
15	視察旅行	東亜事情研究会 会会員	4名	青島・南京・香港・高雄・台南・台北・基隆・門司	1931/7/16~8/10ころ	大倉高商新聞	1931/7/15	
16	第1回満蒙視察旅行	東亜事情研究会 会会員	4名	京城・奉天・新京・ハルビン	1932/7/22~	大倉高商新聞	1932/9/25	
17	第2回満蒙視察旅行	東亜事情研究会 会会員	10名	釜山・安東・奉天・新京・ハルビン・チチハル・洮南・ペイアン・タラ・奉天・湯岡子・大連・神戸	1933/7/17~8/20	大倉高商新聞	1933/7/25	小林講師指導
18	満州視察旅行	東亜事情研究会 会会員	5名	京城・安東・奉天・ハルビン(未定)・湯岡子・大連	1934/7/10~7/31	大倉高商新聞	1934/7/25	
19	満鮮視察旅行	東亜事情研究会 会会員	3名	釜山・京城・平壤・安東・本溪湖・奉天・撫順・新京・ハルビン・大連	1935/7/9~8/13	大倉高商新聞	1935/9/25	渡部寅二教授も同行
20	視察旅行(中止)	東亜事情研究会 会会員		南京・上海方面	1936/7~	大倉高商新聞	1936/7/25	
21	鮮満視察講演旅行	文化研究団体	4名	釜山・京城・平壤・安東・本溪湖・奉天・新京・撫順・大連	1937/7/21~8/5	大倉高商新聞	1937/7/25	
22	鮮満視察旅行	文化研究団体	3名	釜山・京城・清津・新京・ハルビン・大連	1938/7/下旬~	大倉高商学報	1938/7/25	
23	鮮満視察旅行(中止)	文化研究団体		1939夏季に実施予定		大倉高商学報	1939/6/25	

※名称は当時の表現をそのまま使用した。

稲垣知雄氏が描いた大倉高等商業学校と修学旅行

れない。

1920（大正8）年4月の高商への昇格後、初めての高商の学生による海外への修学旅行が、稲垣氏が参加した1922年の旅行である。引率の教員がいて、卒業年の3年生が参加しており、卒業旅行を兼ねて行われたことがうかがわれる。

この後、実施主体は東亜事情研究会に移り、1925（大正14）年から1936（昭和11）年に中止となるまで、満州や朝鮮への視察旅行が行われていく（表3 No.11～20）。参加者は同研究会の会員であり、学年の区別はない。教員は学生の研究の指導・補助という立場で、同行することになった³⁷⁾。また、学生たちの学術研究団体が実施主体であることから、修学旅行というよりも調査研究により重きを置いた旅行が期待されていたようである³⁸⁾。

東亜事情研究会による視察旅行は、1937（昭和12）年7月に新聞部・広告研究会等の文化研究団体が主体となり、「朝鮮南満文化現情の視察と『移動高商』の名の下に講演を行う旅行」が実施された³⁹⁾。しかし、1939（昭和14）年夏に実施予定であった「鮮満視察旅行」は、「従来実施されてきた現地見学旅行は現地軍によつて一切差止められた、従つて昨年より積立金を行つてゐる本校鮮満旅行も此の為に取やめになり、今夏文部省に於て組織、派遣する興亜青年勤労奉国隊に本校生徒五名を参加させる事とかへる事になつた」として中止となった⁴⁰⁾。学生全体が参加する修学旅行が野外演習に替えられたことと軌を一にして、有志による海外研修も戦時体制へ組み込まれることとなった。

ここで改めて1922年の修学旅行について考えてみたい。大倉商業学校時代の修学旅行と、高商時代に主となる東亜事情研究会による視察旅行は、実施主体が学校と研究会であること、卒業旅行という意味合いがなくなること、より調査研究に特化した旅行が期待されていたことなど、違いが多くある。この変化の要因として、一つには毛利氏の言うように関東大震災の影響で一時的に修学旅行が中止されたこと、二つには高商昇格後に学生の自治意識が高まり、自主的な活動が活発となっていったことがあげられるのではないか。大倉高商は1920年代後半から戦前の黄金期と呼ばれる時期に入り、運動・文化各部の活動が盛んとなった。合宿や視察旅行等で、剣道部や端艇部、卓球部、弁論部、講演部、商経研究会などが国内各地に出かけている。学校側が主体となって実施されていた大倉商業学校時代の有志による修学旅行から、学生が主体となる学術研究団体による視察旅行や合宿へと性質が変化していったことが分かる。1922年の修学旅行は、学校が主体となり引率の教員がつくこと、参加者は3年生で卒業旅行の意味合いもあることなどから、大倉商業学校時代の修学旅行の伝統を色濃く受け継いでいる。1922年の修学旅行は大倉商業学校以来の伝統を引き継いだ最後の有志による修学旅行と位置づけることができると考える⁴¹⁾。

おわりに

稲垣知雄氏の大倉高等商業学校時代（一部卒業後）の作品資料から、特に修学旅行中の作品に注目して論じてきた。他の修学旅行と異なり、旅行記等が残っていないため、これまで詳細が不明であった1922年の修学旅行について、旅行中のスケッチを頼りに可能な限りの旅程を復元することができた。また、木版画「天草丸（甲板客船）」を同級生の方も所蔵していることから、同品質のものを複数枚制作し、同級生と思い出を共有するために木版画を制作したのではないかと推定した。

また、1922年の修学旅行は、大倉商業学校時代の有志による修学旅行の伝統を色濃く残す、卒業旅行として学校が主体となって実施する最後の修学旅行であったと位置づけた。しかし、実施主体が変わりつつも、海外への旅行は継続していたという見方もできるように思われる。今回は概観しかできなかつたが、今後、修学旅行の内容により踏み込んだ考察をしていくことで、また異なる位置づけができるかもしれない。調査研究のあり方、旅費と学校の支援、教員の関わり、旅行に参加した生徒・学生の卒業後に与えた影響など、今後の課題としたい。

最後に、稲垣知雄氏の作品資料について、著作者様、世田谷美術館様へ、展示および写真掲載につきまして快くご許可いただいたことに感謝申し上げます。また、展示および調査にご協力いただいた東京経済大学専門委員の皆様、史料室の皆様へ改めて感謝申し上げます。

注

- 1) 拙稿「[展示記録] 東京経済大学創立120周年記念展示『東京経済大学120年と創立者大倉喜八郎』について」(『人文自然科学論集』第149号, 東京経済大学, 2021年12月)。
- 2) 小池智子「東京・版画・三〇年代——稲垣知雄が刻んだ東京の貌」(展覧会図録『都市から郊外へ——一九三〇年代の東京』, 世田谷文学館, 2012年2月), 同「稲垣知雄旧蔵創作版画誌」(『世田谷美術館紀要』第14号 [平成24年度], 世田谷美術館, 2013年3月)。
- 3) 毛利晃雄「卒業」(『大倉高商で学んだこと(回顧談集)』, 私家版, 2000年7月) p.14。「卒業旅行は海外旅行だ。(中略)。大倉では学生が社会人になる前に異国文化にも接しておくべきだとの主旨から卒業前に海外旅行を実施したのだ。大正十二年三月の卒業生(高商第一回)はマニラを訪問したとのことである。私は大正十二年四月の入学なので、第一回卒業生とは入れ替わりになったのだ。この話を入学式で聞き、たのしみにしていたが、此の年の九月一日、関東大震災が起き、校舎は全焼し、窮屈な授業を強いられていたので大正十三年三月の高商第二回卒業生は中止となった。その後、復活せず、遂に廃止になってしまったことは残念である。」と記される。
- 4) 『稲垣知雄全版画集』(形象社, 1982年)年表より抜粋。
- 5) 『広告研究』第1集(大倉高等商業学校広告研究会, 1930年12月)。

- 6) 『交通広告資料』(大倉高等商業学校広告研究会, 1930年2月)。
- 7) No.3 スケッチ「霞が関」については制作年の記載がない。しかし, No.2「霞が関」が同じ場所を描いていること, またNo.2とNo.3は紙のサイズが同じであり, 同一のスケッチブックを使用したと思われることから, No.3はNo.2と同一の時期に描かれたものと推定した。同じくNo.18「高雄ニテ」は制作年の記載がないが, 台南地区を訪れた際のスケッチと推定できるため, 台南地区を描いたNo.16, 17の後に加えた。
- 8) 『大倉商業学校校友会雑誌』第31号(1923年3月) pp.125~126。なお, 「フィリッピン旅行」の旅行記は前号である第30号に掲載されたと記されるが, 欠号のため詳細不明である。
- 9) 大阪商船三井船舶株式会社編・発行『大阪商船株式会社80年史』(1966年5月) p.320。
- 10) 鈴木君三郎「アラバマ丸にて」(『大倉商業学校校友会雑誌』第31号, 1923年3月) pp.102~103。「月清き南国の夜の更け行くをやしのはかげに銀の海見る」との一節など, 詩歌中に南国の風景を詠み込んでいる。
- 11) 塩山正純「『大旅行誌』の思い出に記された香港——昭和期の記述より」(『文明21 愛知大学国際コミュニケーション学会紀要』第40号, 愛知大学国際コミュニケーション学会, 2018年3月)。東亜同文書院生による大調査旅行を香港に焦点を当てて考察している。この中で, 「その他の南方の各地と同じく, 香港にも例えば東京ホテル, 松原, 野村, いろは, 朝日に代表されるような日本人の経営による宿泊施設があり, 大旅行調査の初期から書院生たちは, 外国資本や中国人の経営による宿ではなく, ほぼ例外なく日本人経営の旅館に投宿していたことが『大旅行誌』の記述からも見てとれる。大正期までは松原旅館・松原別館, 千代田, 旭, 吉岡, 野村といった旅館に宿泊して, 畳や風呂など久々の「日本」を堪能した様子が窺える。」と指摘している。修学旅行中に日本人経営または日本式の旅館に宿泊することについては, 井上米三・金田生蔵・榎本卯之助・後藤富蔵「南清旅行上海記(『南清修学旅行雑記』より)」(1911年7月13日~同月19日)(『大倉商業学校校友会雑誌』第10号, 1911年7月)に「蘇州路ヲ過キ, 馬鉄路四十二号東和洋行ニ着イタノ八十時過頃テ, 三階日本室ニ案内セラレ, 十二人, 六人宛ノ二室ニ分宿スルコトニ^{イキ}ニナツタ。室ハ奇麗ト云フ程デハナイガ, 三等船宿ノベンキ, 荷物ノ臭気紛々トシテ薄暗キ窮屈ナ船ヨリ来リシ余ニハ, 浦島ノ竜宮ニ於ケルヤウナ感ガシタ。洋服ヲヌキ捨テ, 大ノ字ヘノ字思ヒ思ヒノ字形デ型リ, 久シブリノ日本室デ船疲労ヲ発散サシタ。], 旅行先の日本人宅に宿泊することについて, 福島俊彦「第七日(朝鮮と人蓼)(『朝鮮修学旅行記』より)」(1915年9月8日)に, 「開城では日本人の旅館が少く, 従つて非常に高いので, 実は我々も此の理由で(?) 茲にお願いして休む事にしたのである。」(『大倉商業学校校友会雑誌』第20号, 1915年12月)と記している。修学旅行で日本人の旅館や日本式の部屋が好まれたことがうかがえる。上記資料は『東京経済大学百二十年史 資料編第一巻』(日本経済評論社, 2020年11月)所収(p.264)。
- 12) 前掲注11 塩山正純「『大旅行誌』の思い出に記された香港」の中で, 親身に世話を焼いてくれた旅行先の人たちへの感謝の念を記す生徒たちの日記中に, 「海防行き客船への乗船交渉に苦戦する彼らに助太刀してくれたときには『我等の此の悲境に深く同情され種々対策を講じ大阪商船に交渉の結果, 日本人使用禁止のデツキパツセンヂヤーを許可してもらつた』[大旅行誌21:45]と記し, (以下略)」とある。
- 13) 修学旅行における, 現地在住の卒業生による協力については, 村田泰三郎「昌図旅行誌」(1906年8月1日), 「満洲旅行記」(1906年7月21日~8月14日)(『大倉商業学校校友会雑誌』)

- 誌』第6号, 1907年7月28日)に「暫くする内卒業生里見信吉氏来り訪へり。而して貨幣を軍票に換へるの良策を説き(余は此の日の軍票相場を知らざりし), 二パーセントのコミッションを取られて軍票に換へたり。余は里見氏の機敏なるに驚けり。氏の案内にてロス町の建築壮大なるを見, 支那人の青物・乾物・魚類市場を見る。], 井上米三・金田生蔵・榎本卯之助・後藤富蔵「南清旅行上海記(「南清修学旅行雑記」より)」(1911年7月13日~同月19日)、『大倉商業学校校友会雑誌』第10号, 1911年7月21日)に, 「晩饗後, 稲葉君ノ案内デ「ダマロー, スマロー」通ヲ見物シタ。(中略)電車テ稲葉君ノ支那料理ノ御馳走ヲ受クヘク急イタ。(中略)又稲葉君ハ吾等ヲ愛シ呉ル、コトノ厚キ, 同ジ学ビノ窓カラ出タ者ナレバコソト思ハレタ。」などの記述がある。上記資料は前掲注11『東京経済大学百二十年史 資料編第一巻』所収(pp.216~217, 240, 243, 245)。
- 14) 外務省通商局『香港事情』(啓成社, 1917年5月) p.118。
 - 15) 片倉佳史『古写真が語る台湾——日本統治時代の50年 1895-1945』(祥伝社, 2015年5月) pp.64~65。
 - 16) 前掲注15片倉『古写真が語る台湾』。高商の位置は同書 p.37 地図から確認した。
 - 17) 「元台北高商校長 葵友会特別会員切田太郎氏散策中に急死」(『大倉高商新聞』第98号, 1937年9月25日)。
 - 18) 福島俊彦「第七日(朝鮮と人参)〔朝鮮修学旅行記より〕」(『大倉商業学校校友会雑誌』第20号, 1915年12月), 前掲注11『東京経済大学百二十年史 資料編第一巻』所収(pp.262~264)。
 - 19) 村松博一・貴志俊彦編『古写真・絵葉書で旅する東アジア150年』(勉誠出版, 2018年3月) pp.148~149。
 - 20) 前掲注15片倉『古写真が語る台湾』 pp.192~193。
 - 21) 前掲注15片倉『古写真が語る台湾』 pp.194~195。
 - 22) 「居官のある古式の家」(武田久吉編著・石橋五郎編『日本地理大系11 臺灣篇』改造社, 1930年, p.307)に屋根や窓の形が酷似する。同項には, 「凡ての風俗と同じ様に臺灣の住宅形式も南支那のそれを受け継いだものである。祖先の神位を安置した廳堂は乗客の応接に用ひられ, 入口に刺繡の布を下げた房間は居室でもあり寢室でもある。厨房と灶脚と云ひ人目のふれぬ後面に間取る。図は新營街所見のものでこの前庭に旗竿があるのが珍しい。居官と言ひ, 五丈程の高木を両側に樹つ。家人が相当の高位官職にあるを示した往時の名残りである。」と記される。
 - 23) 前掲注22『日本地理大系 臺灣篇』 p.160。「ココ椰子」(高雄州及澎湖庁; 屏東)の項で, 「椰子で臺灣で最も南部なのはココ椰子で臺灣でも南部でないと充分に育たない。」とある。また, 前掲注15片倉『古写真が語る台湾』 p.198に旧駅付近(高尾駅は1941年に新駅が建設されている)の様子として椰子並木が立ち並ぶ山下町通りの絵葉書を掲載している。
 - 24) 国立台湾博物館公式ホームページ (<https://www.ntm.gov.tw/jp/>)。
 - 25) 前掲注3毛利「卒業」。
 - 26) 『大倉高等商業学校三十年史』(葵友会, 1930年10月) pp.52~53。
 - 27) 『東京経済大学の100年』(東京経済大学, 2005年5月) p.62。1932(昭和7)年6月, 若松第29聯隊にて実施された3年生の野外演習(3日間)について, 『大倉高商新聞』第50号(1932年11月30日)の記事「時節柄重視さる、學校教練偏重の傾向 波紋は各方面へ」は,

「六月、三年生各クラスの猛烈な反対にも拘らず、従来古戦場見学として事実上の修学旅行を行いつつあつた慣例を断然破棄、(後略)」し、修学旅行が野外演習へ振り替えられたことを記している。

- 28) 第1回学生勤労奉仕は全学年550名が参加、神奈川県中郡国府村にて1938年7月に実施(『大倉高商学報』第105号、1938年5月25日)、第2回学生集団勤労奉仕は全学年参加、板橋区大泉村にて、1939年7月に行われた(『大倉高商学報』第117号、1939年7月25日)。
- 29) 前掲注26『大倉高等商業学校三十年史』pp.52~53。
- 30) 合同満州旅行について詳細に論じた高援氏は、旅行後の影響について、「1906(明治39)年夏に行われた、陸軍省と文部省主催の満州合同修学旅行を火付け役に、学生生徒を対象とする新聞社や各学校主催の旅行、および生徒自身の『無銭旅行』は、『満州』を目的地として視野に入れるようになった。」と指摘している(高援「戦勝が生み出した観光——日露戦争翌年における満州修学旅行」、『Journal of Global Media Studies』第7号、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2010年9月)。
- 31) 関口貞次郎「関西旅行一般報告」(『大倉商業学校校友会雑誌』臨時増刊、1910年4月)。本報告には、「此行に加はる面々十数日前より図書館に身を寄せ地理の調べ要項の調べさては名勝旧跡等を案内せる種々の書を繕きて準備をさ／＼怠りなく充分実施踏査の暁まどはぬ様下地を塗り置きぬ」とあり、生徒たちが旅行の準備として下調査を行っていた様子もうかがえる。
- 32) 旅行記(報告書)について、高等商業学校と東京高等商業学校(現一橋大学)では、「学生たちは帰着後に報告書を提出することが義務付けられていた」とのことで(平成24年度一橋大学附属図書館企画展示「旅する高商生たち——明治・大正期の修学旅行報告書」パンフレット、一橋大学附属図書館、2012年11月1日)、大倉商業学校でも同様であった可能性がある。
- 33) 友田昌宏「解題」(前掲注11『東京経済大学百二十年史 資料編第一巻』)p.17。
- 34) 『大倉商業学校校友会雑誌』臨時増刊(1910年4月)pp.141~215。
- 35) 『大倉商業学校校友会雑誌』第20号(1915年12月)pp.78~91。
- 36) 1934年7月10日~7月31日に実施された東亜事業研究会による満州視察旅行の期間中に、全学年参加の工場見学が行われているが、「毎年恒例の工場見学」とあり(『大倉高商新聞』第67号、1934年7月25日)、旅行との関係性は不明である。
- 37) 「滿蒙視察旅行団 金融事情調査に 来る十七日出発東亜事情」(『大倉高商新聞』第57号、1933年7月25日)。「小林講師指導の下に団研究題目滿蒙金融事情調査を貨幣、銀行、為替の三部に互つて研究調査し(後略)」とある。また、1935年の視察旅行の記事では、「渡部寅二教授も同行」と記される(『大倉高商新聞』第78号、1935年9月25日)。教員は引率というよりも学生たちの研究の指導・補助をする役割が大きかったことがうかがわれる。
- 38) 前掲注37「滿蒙視察旅行団 金融事情調査に 来る十七日出発東亜事情」に「従来同旅行団は無定見な見学旅行に墮し、その成果さへ疑はれ轟々たる非難に鑑み今回は特に研究題目を選定し会員を増派したが如何なる成績を収め得るやは注目されてゐる。」と記される。
- 39) 「狭見と旧習を排し“大同団結成る”文化研究団体の発展ぶり 外に鮮満視察講演の旅 内に記念祭文化事業」(『大倉高商新聞』第97号、1937年7月25日)。
- 40) 「現地軍発表に鑑み鮮満旅行中止す」(『大倉高商学報』第116号、1939年6月25日)。
- 41) 1923年、1924年と有志による(海外への)修学旅行の記録はない。毛利氏は1926年卒であり、在学期間中は少なくとも有志による(海外への)修学旅行はなかったと考えられる。